

# 研修報告

2023.02.25

## ◇ 大阪北支部研修「死を前にした人に、あなたは何ができますか？」

令和5年2月25日（土）午後からの研修（Zoom）、新しい取り組みでしたが20名近くの参加者があり、2時間という限られた時間の中で、3人によるワークショップを2サイクル行うというハードなスケジュールでした。

基本的には援助技術のスキルを高めるために、いくつかの事例をもとに、「患者さん役」、「聞き手役」、「タイムキーパー役」を交代で演じることから得られる学びの時間です。普段の仕事柄、聞き役に回ることの多い立場ですが、当事者役になったり、客観視できる立場になったりすることで、気付かされることが多くあります。『同じもの』を見ていても、見方や立場によって受け止め方が違います。援助者として、「本当に本人の思いに寄り添えているか？」という基本的な問いかけがSWとしての原点です。

「共感」と「反復（否定しないこと）」についての説明もありました。当事者にとって重要なことは、支援者との信頼（ラポール）が築けるかが大切です。C.R. ロジャースが提唱した非指示的な心理療法として、来談者（クライエント）中心療法があったことを思い出します。「沈黙」の意味や「間」の取り方も大事ですね。

「今、気になっていることはどんな事ですか？」という問いかけに対し、「患者さん役」の人の思いは様々です。「自分の事が分かってもらえてない」と感じたら、いら立ちの言葉が出てきます。「この人になら少し話してみようかしら？」と思えると、長々と不安を訴えてくる場合もあります。「聞き手役」も楽ではありません。

後半は「3つの支え」について学びました。将来の夢に対し、「限られた時間の中で何ができるか？」というSWの役割です。大事なものは、支えとなる関係性、当事者が選ぶことのできる自由、についてです。「現実」と「希望」のギャップが苦しみとなっている当事者にとって、自分と言う存在感を大事にしてくれる支援者が、信頼できる支援者となるからです。

絶望の中から、「暗闇に火を灯す」ことのできる支援（SW）が求められます。バイスティックの7原則を思い出せば、『個別化や意図的な感情の表出』や『自己決定』に繋がります。その前提にあるのが、『受容』と『非審判的な態度』です。

ロールプレイの中で、「沈黙」についての意見（気づき）が出されました。聞き役となった時は、「沈黙は怖さ」を感じたけれど、患者さん役になったら、「沈黙は安心感」になったと・・・とても共感出来る言葉でした。ITによるスキルと同様、コミュニケーションの能力にも差が出てきます。アセスメントの感性を磨くことにも繋がります。北支部としての新たな取り組み、期待しています。

研修の準備や司会など、講師の田中宏幸さんにお礼申し上げます。

大阪北支部 李 千秋

